

歴史博物館1997・櫛宜田2002の区分によれば「加工具」となるが、不定形石器にスクレイパーなどの完成品に加え、製作途中の失敗品等を含む可能性がある。また、本稿では磨石・敲石・凹石を一括して磨石類としている。これは「磨面」「敲打痕」「凹痕」のうち複数の使用痕が一つの個体に含まれているためである。「調理具」に区分されているが、異なる種類の凹痕があることから、同一の機能か否かは問題が残る。以上、大きな制約があるものの、試みとして区分別の石器組成を見てみたい。本遺跡は、狩猟具・武器12.3%、調理具6.4%、加工具が80.8%となり、圧倒的に加工具が多い。比率は若干異なるものの、加工具が卓越する点は古津八幡山遺跡とほぼ同じである（狩猟具・武器19.4%、調理具17.4%、加工具62.0%）。このような傾向は、櫛宜田氏のⅡ3類（武装強化しなかった集落で、収穫具欠落・調理具卓越）となり、石器組成から戦乱や緊張状態を想定できない。

狩猟具・武器が卓越するのは、沖積微高地の道端V遺跡・中曽根遺跡や砂丘上の長松遺跡で、50%以上の比率を有する。また、砂丘上の砂山遺跡も37.2%と高い比率を誇り、高地性環濠集落の本遺跡や古津八幡山遺跡より狩猟具・武器とされたものの比率が高い傾向にある。この要因としては、遺跡の主要時期が中期であること（道端遺跡・長松遺跡）や、不定形石器・磨石類の少なさに起因するためと思われ、緊張状態を反映した結果、低地の遺跡で狩猟具・武器が多いとは考えがたい。

## B ガラス小玉について

本遺跡では墓域と考えるA地点1TのSK1からガラス小玉72点（完形品68点、半損品4点）が出土した。SK1は完掘していないことから、これ以外に副葬品が存在する可能性があると共に、ガラス小玉の数量も更に多くなる可能性がある。検出したガラス小玉は1つの墓の副葬品としては特筆すべき数量であるため、弥生時代における県内の出土例を中心として出土分布状況を概観する。

県内でガラス小玉の出土したのは10遺跡である。このほかに上越市（旧柿崎町）木崎山遺跡〔高橋ほか1992〕で丸玉が検出されているが、古墳時代の可能性が高い。現状において当該期のガラス製品は小玉が圧倒的に多い。ガラス小玉は上越市裏山遺跡〔小池ほか2000〕の6点を筆頭に、長岡市原山遺跡〔小林1992〕で複数点、新潟市（旧新津市）古津八幡山遺跡〔渡邊・立木ほか2001・2004〕で2点、それ以外は上越市吹上遺跡〔笹沢ほか2006〕・長岡市横山遺跡〔広井・小林1992〕・新潟市（旧巻町）大沢遺跡〔甘粕ほか1982〕・村上市堂の前遺跡〔埋文事業団ほか2008〕で各1点が報告されているにすぎない。遺構内出土は裏山遺跡1号堅穴建物（2点）・4号堅穴建物（3点）、大沢遺跡4号堅穴（1点）に限られ、その他は包含層・表土からの出土である。山元遺跡例と同じように、弥生時代の墓からの出土例は現状ではない。特異な例として長岡市（旧寺泊町）諏訪田遺跡で管玉に似た棒状品が確認されているが、孔がない〔寺村1991〕。帰属時期は明確でないが、弥生時代中期の可能性<sup>1)</sup>がある。

ガラス小玉の帰属時期については、遺構出土資料が少ないことから明確にし難いが、各遺跡の盛行年代から推定すると、吹上遺跡が弥生時代中期に遡る可能性が残るが、それ以外は弥生時代後期の可能性が高いと考える。県内では後期に入り、出土例が増加する可能性が高い。後期に入り、ガラス玉の分布が拡大する点や、量的に増加することが指摘されており〔富樫2003ほか〕、県内例はこの状況と合致する。ガラス小玉出土遺跡は、大沢遺跡・堂の前遺跡を除いて環濠集落であり、このうち裏山遺跡や古津八幡山遺跡

<sup>1)</sup> 諏訪田遺跡ではこのほかに「淡いコバルト色で一部が風化しているガラス製の小玉（厚さ6.8mm、径8.2×8.0mm、孔径上部1.8mm、下部1.6mm、重さ0.7g）が採集されている」という〔寺村1991〕

は本遺跡と同様に高地性環濠集落である点も重要と考える。

次に、北陸の出土状況について雑感することにした。富山県では久々氏らの集成がある〔久々ほか2003〕。弥生時代の例としては集成されたもののうち、ガラス小玉は8遺跡で出土しており、このうち3遺跡は墳墓である。福野町安居墳墓群7号墳では31点以上、南太閤山Ⅰ遺跡3号方形周溝墓では6点などがある。なお、このうち安居墳墓群7号墳は抜根の際に出土し、主体部は未完掘のため、実際の数量は更に多くなるという。

このような大量副葬は、旧国では能登にあたる

石川県高松町中沼C遺跡2号方形周溝墓においても認められる〔折戸1987〕。2号方形周溝墓は南北9.8m、東西10.3mの規模を有し、2.75×1.3mの主体部からガラス小玉112点もの出土が報告されている。ガラス小玉が多量に副葬された墓は、北陸内でもそれほど規模の大きな墓ではないことが重要となろうか。

山元遺跡出土品については第Ⅵ章での記述とおり、素材はカリガラスであり、引き伸ばし法で製作されている。上記の県内例は全点で確認してはいないものの、青灰色の色調を呈するものが多く、肉眼での見解であるがカリガラスの可能性が高いと考えている。東日本全体でこのような傾向が看守できるとの指摘もあり〔肥塚1997・富樫2003など〕、一連のルートにのって搬入された可能性が高い。搬入先については、限定できないものの、日本海側では丹後で多量副葬が著名である。ガラス製品の卓越から「丹後王国」との評価もあり〔富樫2003〕、中沼C遺跡2号方形周溝墓にみる能登での大量副葬、丹後と北陸北東部の土器様相の類似〔田嶋2007など〕、能登での天王山系土器の出土等から、丹後を中心とした日本海側のルートでもたらされた可能性が高いと考える。

## C 土器の年代について

### (1) 東北系

本遺跡で主体的な土器群であり、在地の土器と考える。出土点数は多いものの、残存率が高い土器はそれほど多くないことに加え、廃棄の同時性が確認できるものは限られている。ここでは、これまでの研究成果に照らし合わせ、本遺跡出土の東北系土器について検討を試みる。

東北の後期前半に位置付けられるものに、福島県白河市天王山遺跡出土土器を標識とする天王山式土器がある。1950年代に発掘調査が行われ、伊藤信雄氏〔伊藤1950〕・坪井清足氏〔坪井1953〕・中村五郎氏〔中村1976〕・石川日出志氏〔1990・2000・2003・2004〕らにより、編年の位置付けの大枠が定められた。交互刺突文を一つのメルクマールとするこの土器の編年の位置については、後期説と中期説があり、新潟県内を含めた北陸の研究者は中期説〔田中1989、田中・丸山1999など〕、東北の研究者及び石川日出志氏は後期説を鮮明に打ち出している〔中村1976、石川1990・2000aなど〕。前者の根拠は、県内を中心に北陸の諸遺跡で、中期の小松式や山草荷式・宇津ノ台式と天王山式が出土することであったが、古津八幡山遺跡の状況等からも主体は後期と考える。ここでは、近年、報告例が増加した日本海側の変遷を確認したのち、福島県の状況を加味して山元遺跡出土土器の年代を考えたい。



第22図 県内における弥生時代のガラス小玉出土遺跡